



【荒井建設会社概要】

- ・設立: 明治27年
- ・資本金: 1億円
- ・従業員数: 164名
- ・本社所在地: 旭川市4条西2丁目2-2
- ・支店・営業所: 札幌支店、東京支店、函館営業所、道東営業所

【事業内容】

- ・土木工事、建築工事、とび・土工工事、鋼構造物工事、舗装工事、造園工事、水道施設工事、管工事土木
- ・その他上記に関する一切の業務

【売上高】

15,591百万円(平成26年3月期)

会員企業トップインタビュー第6回目の今回は、昨年11月に創業120周年を迎え、創業者・荒井初一氏の念い(おもい)を受け継ぎ、実業を通して地域貢献を続ける荒井建設株式会社の荒井社長にお話を伺いました。

Q. 御社の創業の経緯や沿革についてお聞かせください。

A. 創業者荒井初一は、明治26年に郷里の富山県砺波から北海道に渡り、明治27年に旭川にて米穀卸売業「荒井商店」を開業しました。物のない時代に北海道の皆さんに生活必需品であるお米を供給しようとの思いであったと聞いています。その後、明治37年に長兄が営んでいた請負業の「荒井組」を継承し、昭和23年には現社名に改めて今日に至っています。

社長は私で5代目となりますが、当社は創業以来、地域の生活環境に寄与する鉄道・発電所の建設をはじめ、道路・治水・治山・農業基盤・下水道の整備などの公共インフラや学校・庁舎・福祉施設などの公共建築を手掛けるとともに、民間工事でも数多くの実績を重ねてまいりました。

Q. 御社は昨年で創立120周年を迎えられました。長きに亘り歴史を刻むことができた理由は何でしょうか。

A. 創業者初一の教えである「地域への奉仕」という精神を貫いてきたからです。初一の地域貢献で特筆すべきは層雲峡の開発と大雪山の調査研究です。大正11年に塩谷温泉(現層雲閣グランドホテル)を引き継ぎ、翌年には上川～層雲峡間の十数キロの道路工事を自費で成し遂げ、層雲峡開発に布石を打ちました。また、初一は「大雪山調査会」の設立活動や国立公園への指定にも尽力しました。

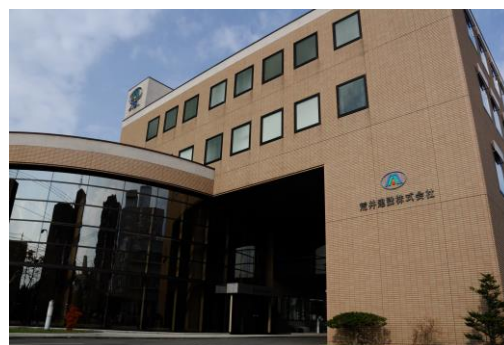
Q. 「地域貢献」への考え方は今でも企業理念として脈々と受け継がれているのですね。

A. 初一と比べればスケールは小さくなっていますが、受け継がれていると思います。

会社を取り巻くステークホルダーである従業員や取引先・お客様、そして一般市民や行政も含めて、地域の皆様から高い評価を頂ける会社が一番魅力ある会社であると考えています。お客様にだけ良くて協力企業や従業員の評価が低い会社であっては駄目だと思います。そして、企業が持つ技術力や営業力などの「経営資源」と、地域と共存するという「経営理念」、その両方の掛け算で価値の高い会社を目指していきたいと思っています。

Q. 御社の社風についてお聞きします。御社のホームページを拝見すると「元気を出せ」という社長の言葉が載っていますが。

A. それは、先代が「うちの社員は元気がない」との思いから発したコメントです。当社は昔から、『大事なことは上で決めるから社員は自己主張せずに言われたことをキチンとやっていたら良い』との悪しき社風がありました。ただ、逆に良い面としては、会社の歴史が長いので、そのことに裏打ちされた自信、経験、確かな仕事ぶり、お客様からの信頼感が高いという特色があります。



荒井建設本社社屋

Q. 今もそのような社風なのでしょうか。

A. 堅実な社風は変わっていませんが、世代が交代し、少しずつものを言う雰囲気になってきたと感じます。今は前例踏襲でやっていけば済む時代ではないし、IT企業ほどではなくても、社員にはチャレンジ精神とスピード感を持ってやって欲しいと考えています。

最近では、指示待ちではなく自分で考えて行動してくれる社員が増えてきたと頼もしく感じています。

Q. 最近、特に建設業界では人材確保が困難といわれていますが、どのような対応策をとっていますか。

A. 採用面では、インターネット・HPによる募集広報を充実させています。また、従業員に対しては、賃金や待遇面での充実のほか、会社の方針や将来像について分かりやすく伝えていくことや、個々人のキャリアパスや人生設計を示す等の情報の共有化が大事だと思い実践しています。

一方、業界全体の課題としては、現場に出ると休暇が取れないという課題を解決していかないと人材は定着してくれないと考えています。現実問題として、休みが少なく家族と一緒に暮らせないという理由で転職する人間も出てきているのです。

Q. 女性技術職はいらっしゃるのでしょうか。

A. 当社にも女性技術職がおり、過去現場をもっていました。現在は内勤をしてもらっています。昨今、「ドボジョ」という言葉が象徴するように、土木系女子の社会進出がめざましいですね。今後、部門に関わらず、積極的な活用方法を検討していきたいと考えています。

Q. 今後、荒井社長が目指す将来の企業像についてお聞かせください。

A. 時代の流れやニーズを素早く読み取り、企業が育ててきた経営資源を活かしつつ、企業固有の経営理念や企業の社会的責任(CSR)に基づく企業活動を行っていくことが、今求められていると思います。その道のりは、公共工事予算の動向や建設産業に対する誤解もあって厳しいと思わざるをえません。

それでも当社は、建設工事を中心(コア)として、社会に新しい富やサービスを生み出すという使命を果たしていくために、今後も全社をあげて英知を結集し、一層の技術力・収益力の向上に努めていきたいと思っています。

同時に、当社の事業領域を総合建設業から更に拡げて、地域活性化支援(コミュニティ・サポート)、快適生活支援(コンフォート・サービス)、住民の安心安全生活支援(カスタマー・セイフティネット)などの幅広い形で地域社会と関わり、公共事業、公的サービスの代行、PFIなどに積極的に取り組んでいきたいと考えています。

Q. 地域と一体となって地域に役立つ総合産業を目指すということですね。

A. そうですね。建設業は公共工事がメインですが、最終ユーザーは市民であるにもかかわらず、どうも市民目線になっていません。発注するお役所の方ばかりを向いてしまう傾向がありますが、作ったら終わりではいけません。

建設業で培われた経験と技術は、社会資本を作る以外でも役に立つと思います。例えば公営住宅の管理や維持補修、水道や電力も小規模のものであれば、民間の発想で少しコストを下げながら参入していくことは可能ではないかと思っています。

Q. 旭川で初のPFI事業となる「旭川市高台小学校建設工事」がその象徴でしょうか。

A. 高台小学校の建築工事は、私にとっても最も印象に残っている物件ですね。本工事は、平成20年に受注し、平成22年に完成引渡しとなりましたが、平成37年度までの間、当社がメインとなるSPC(特別目的会社)が維持管理業務を担います。

設計・建設にあたっては、「オープンスクール化」、「エコスクール化」、「インテリジェント(情報)スクール化」、「開かれた学校づくり」、「安心・安全な学校づくり」という5つの方針に沿って、様々な工夫を凝らしました。

小学校6年間は、子供が成長する過程で大切な時期であり、また学校は子供が一日を過ごすもう一つの家でもあります。そのような大切な「学び舎」を作るPFI事業に参画できたことは、大変感慨深いものがあります。



旭川市高台小学校